



C4Cだより

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1-45-1-302
TEL:06-6622-5645 / FAX:06-6621-7139
メール:community_4_children@yahoo.co.jp
HP:http://www.community4children.com/

カンボジア 「第1回カンボジア農村ワークキャンプ」無事終了しました!

カンボジア国プノンペンから南に車を2時間ほど走らせたところに、レヴィートーン村があります。2020年2月8日から3泊4日、この村でホームステイし、村の小学校の図書室をみんなで整備するワークを行いました。参加者は、仙台から3名、大阪から3名、東京から2名、タイから2名、C4Cスタッフ3名の総勢13名で、高校1年生からシニア世代までの多様な方々が集まりました。

現地連携団体クメール・コミュニティ・ディベロップメント(KCD)が活動するレヴィートーン村は、町から遠く、道路も舗装されておらず、小学校はありますが、卒業すると中学校は6キロ以上離れた村までいかなければなりません。そのため小学校を卒業した約20%の子どもしか中学に行けません。小学校の図書室も整備されておらず物置状態になっていたため、司書の先生が「子どもたちが集まれる場所にしたいが、どうすればいいだろうか」という相談をKCDスタッフにしたことから、今回のC4Cワークが実現しました。



36℃を超える暑さのカンボジアに到着したワーク参加者たちは、現地で初めて全員が顔を合わせました。そしてホームステイやワークと一緒にするなかで、お互い打ち解けていったようです。図書室の整備や飾りつけも、事前にリーダーや作業工程を決めたわけではなかったにも関わらず、各自が自分でやることを考え、提案し、話し合い、周りとの協力しあって進めていきました。たくさん子どもたちが集まり、一緒に作業を手伝い、一緒に遊び(?)ながら楽しくワークを終えました。

また村のピースクラブ(子ども会)との交流の時間では、カンボジアの青年が伝統舞踊を披露してくれ、私たちも炭坑節でお返し、最後は一緒に暗くなるまで踊りました。特に小さな子どもたちのパワーには、みんなタジタジ。ホームステイ先の家族も親切で、地元自治体や自警団の人々が私たちの滞在中ずっと見守ってくれました。



ワークに行った村は、決して裕福とは言えない村です。水や食事にも不安はあったことでしょう。最初は、慣れないカンボジア農村生活体験や多くの子どもたちのパワーに押し入れ気味だった参加者の皆さんも、積極的にワークに取り組み、それぞれに新たな気づきや感動があったようです。異なる文化や経済状況に驚きながらも、「子どもたちが



たくさん協力してくれ、言葉でのコミュニケーションが図れなくても動きで一生懸命伝えようとしてくれた」「同じ世代の子どもたちが地域のために様々なことを考えていることに刺激を受けました」「自分の常識を覆す体験だった」と参加者は滞在経験からよい印象を受けたようです。

最後にKCD事務所で振り返りを行い、C4C乗原から指摘された「自分が相手にしてあげたいこと」と「相手が求めること」の相違について、参加者皆さんの心に宿題を残して、無事ワークが終了しました。

渡航期間は、ちょうど新型コロナウイルス感染者が日本でも確認されはじめた頃であったため、若干の不安はありましたが、パンデミックの宣言はされておらず、手洗い、消毒ジェル、マスク等で予防するようにしました。カンボジアからの帰国後、世界中で新型コロナウイルスの感染が広がり、長距離移動が制限されるようになり、日本から海外へ渡航することができなくなりました。この状況はしばらく続くようです。Beforeコロナの時期に私たちがカンボジアに行ってワークができたことの意味をもう一度考え、Afterコロナの時期にどのような応援ができるのかをじっくり考える時間を、このコロナ禍の中で皆さんにも持っていただけたらいいと思います。(文責:加藤)

宮城

台風19号からの復旧・復興をめざして
～丸森町立筆甫小学校における防災学習～

前号では、昨年台風19号により被害を受けた丸森町の災害ボランティアセンターの活動状況を紹介させていただきました。2019年度、同じ丸森町の筆甫(ひつぽ)小学校で、福祉・防災学習コーディネーター 菅原が、丸森町社会福祉協議会の職員と一緒に6月・2月の2回にわたって防災学習の講師を務めました。本来は11月にも予定されていましたが、筆甫地区も台風によって大きな被害を受け、筆甫小学校においては児童が避難を余儀なくされ一時休校となるなどの状況があったため、2回の開催となりました。

6月の授業では、町内のハザードマップを見たりしながら「災害」についての知識を深め、防災カルタで楽しみながら防災について学びました。

2月の授業では、防災クッキングとして、ポリ袋に材料を入れて湯せんにかける方法(パッククッキング)でオムレツをつくりました。非常食の紹介もを行い、災害時の「食」の大切さや備え方について学びました。台風後に非常食を食べたことを話してくれたり、非常食について色々と質問してくれる児童もいました。

台風被害が残る中、先生方の想いもあり実施できた授業でした。今回の災害の経験とともに、これからの備えにつなげてほしいと願っています。(文責:菅原)



フィリピン

チャリティ・ラン開催中止
& 活動地域の状況報告

3月8日に予定していた第3回「チャリティ・ラン」は、新型コロナウイルス感染症の影響により開催を中止しました。日本から本取り組みを応援・ご協力くださった皆様、どうもありがとうございました。来年こそは実現させたいと考えています。

活動地では、3月中旬より厳しいコミュニティ隔離措置が続いています。ドゥテルテ大統領は、ワクチンが開発され入手可能になるまで学校での授業は再開しないと断言しています。全ての子どもがオンライン授業を受けられる環境にあるわけではなく、特に、しょうがいをもつ子どもたちの学びや遊びの場はより一層困難な状況にあります。現地団体も、対面での活動は中止せざるを得ず、SNSを活用して利用者のご家族と連携をとり、各家庭での理学・作業療法、特別支援教育や生活スキルの実践などのサポートを続けています。(文責:山田)

タイ&カンボジア

新型コロナウイルス感染症:各国の状況と活動地域の様子について

5月末時点、**タイ**では、厳格な移動禁止令により、ウイルスの抑え込みに成功し、徐々に活動制限を緩和し始めています。とはいえ、長距離移動禁止、夜間外出禁止は制限付きで継続しており、タイへの空路入国禁止令は6月末まで続きます。都市では、経済活動が止まり、失業者も増え、それが原因の自殺も増えています。私たちが支援しているコンケン県のノーンメック村コミュニティ事業もまたコロナの影響を受け、様々な農業研修がキャンセルになりました。学校は、8月の新学期まで休校のところが多く、オンライン授業ができない環境にある子どもたちは十分な教育を受けられない可能性もあります。

カンボジアでは、感染者が少なく、タイほど自粛は言われていませんが、それでも工場の閉鎖や輸出禁止を受けて、失業者が増えています。学校も10月まで閉鎖し、それまでオンライン授業となりますが、農村部ではネット環境が悪く、十分な学習時間は取れません。また一般の人々が利用できる医療設備がほとんどないため、コロナをはじめとする感染症は恐ろしい影響を与えかねませんが、その重大さを理解している人が多いとは思えません。そこで現地団体は、地元の子ども会と協力して、休校している間の年少の子どもたちの学習支援を5名以内の小グループで行うとともに、村々を回ってコロナウイルスの脅威、予防方法などを伝えています。そして遠くの市場に頼らなくてもいいように家庭菜園のための野菜の種子を配布しました。

今後、状況を見ながら事業の再開や必要に応じた支援を考えていきます。(文責:加藤)



写真は、村人への感染予防方法の周知の様子や子ども会の少人数での学習支援の様子。(カンボジア)

代表の
つぶやき

小学校の図書室をみんなで整備する第一回カンボジアワークキャンプを実施出来たことに、今更ながらホッとしています。参加者からは価値観の違いへの気づきや安易に日本の価値観を押し付けてはいけないなど、私たちの常識だけで現地を見るのではなく、現地の人たちの価値観とは何かを考えることが大切だと言った感想が聞かれました。帰国後は外出自粛、緊急事態宣言と人とのつながりを抑制する新型コロナウイルスと闘う見えない敵と戦う日々になり、参加者が集まる機会が持てないままです。C4Cも予定していたフィリピン、タイ、カンボジアへの渡航が不可能となり、夏季のワークキャンプ、交流キャンプも開催できない状況です。市民活動団体も国際協力団体にも様々な影響が発生しています。大阪では市民による市民のためのファンド「新型コロナ禍の社会課題に取り組むNPO、NGO、市民活動を応援共同型の緊急活動支援基金」が発足しました。「誰一人取り残さない」パートナーシップで目標を達成する」というSDGsの理念にも呼応する実践です。この状況と共に乗り越えて行きましょう。